



「協働的な学び」の工夫について

今年も早いもので、師走に入った。市内も至る所でクリスマスやお正月に向けての飾り付けが見られるようになり、子どもも大人も何となく忙しく、楽しい時期であろう。

今回は学習指導要領の前文(以後前文)を再度読み返して感じたことを述べてみたい。最初に、前文の内容で(全て大事な内容であるが)、子どもの主体的・対話的深い学びを实践する上で、根拠となる一部分を抜粋すると、「自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となる」であろう。そのため、学習内容の中に、人生や社会の在り方と結びつけ考えたり、持続可能な社会の創り手となるため、「主体的・対話的で深い学び」に取り組んでいるのである。多くの授業を参観する中で、いろいろな学校で工夫した授業づくりが見られ、質の高まりが感じられる。

一方、令和5年度全国学力学習状況調査報告書の中学校国語科の授業改善のポイントには、「話すこと・聞くこと」において、「(略)知りたい情報に合わせて効果的に質問する指導の充実」や「自分の考えをまとめるには、何のためにどのような状況で話を聞いているのかを意識し、(略)必要に応じて記録したり質問したりしながら聞くことが重要になる。(略)話し手が伝えたいことを確かめたり、足りない情報を聞き出したりするなど、知りたい情報に合わせて効果的に質問することができるよう指導することが大切」とある。小学校国語の報告書にも同様なことが書かれている。つまり、「主体的・対話的」な学習の場で、国語科の課題の一つである「話すこと・聞くこと」が教科横断的に実践できているのかといった疑問が出てきた。授業の中で「ペアで話し合ってください」「グループで話し合ってください」などの場を設定し、考えを深め広げるための協働的な学びを促しているが、それぞれの考えを相手に伝えるに留まっていまいだろうか。もう少し言えば、ペアやグループ等の中で、双方向で意見のキャッチボールができているのだろうかといった不安を持った。先月、全国小学校理科研究大会神奈川大会に参加した。そこで、小学校4年生の授業を参観したが、ペアやグループでの学びに入ると、学習問題に対し、お互いが感じた疑問点や共通点等を話し合い考えを深める姿が見られた。何故、双方向の話し合いができるのだろうか。子どものノートや端末を見たとき、そのヒントが見られた。どの子にも共通していたのが、話し合う前に子ども一人一人が、自分の考えを持って話し合いに参加していること。しかも考えに至った根拠も文字や図で表現しているのである。小学校4学年の理科の「自然の中の水のすがた」の単元の中で、「どうして水たまりができる」ところとできないところがあるのかの問いにペアやグループの場で「生活体験を根拠とした」水は高いところから低いところへ流れる「水がしみこみにくいところに溜まる」などの意見が出され、これに対し、「この前、高い所にも水たまりがあったから違うのでは」とか「水がしみこみやすいところでもう少し具体的に教えて」などの批判的思考で相手の意見や感想を交わし合う姿が見られた。わずかな疑問や共感でも、相手に伝えることは、協働的な学びの場では大事である。また、相手の意見等を受け取る側も、相手の意見等を自分事として捉えることが重要である。自分事の考えを持つには、生活とどのような関わりがあるのかを考えさせる発問の工夫もその一つであろう。そのことが、子どもにとって、考えに加え、その根拠も導き出しやすくなるのではないか。教師は、考えが広がり深まる協働的な学びの場を設定したい。どのような発問をすれば、子ども一人一人が、問題に対し考えを持ち、根拠を持って相手と意見交換ができていのだろうか。今後も、各学校で、深い学びに繋がる研究や授業実践を期待したい。

令和5年度 12月 事業予定

14日(木)

初任研特別活動グループ代表授業

関係小中学校

令和5年度 第121期 教育研究員

検証保育・授業日

比嘉 愛	保育	自分なりのイメージで表現することを楽しむ子を目指して ～絵に表現することの楽しさを味わえる環境構成と援助の工夫を通して～	12月6日
仲里礼子	音楽	思いをもって伝え合い、協働的に学ぶ児童の育成 ～対話的な学びの工夫を通して～	12月20日
仲村高博	特別支援	自らの思いや考えを表現し、協力して行動できる児童の育成 ～SSMを活用した交流活動を通して～	12月21日



中間検討会 I 11月7日(火)

第3回 初任研拠点校指導教員等連絡協議会 (11/21)



初任研 道徳グループ 代表授業 (11/9)



知念 諒 教諭(松島中)「つながりを生み出す力」